

monthly JODO

2011

1

January

宗祖法然上人八百年大遠忌

月刊「浄土」八百五十号記念

特集号

法然上人讃仰会

誕生寺

◆御詠歌◆

ふたはた
両幡のあまくだ
天下りますむく
棕の木はよよ
世々に朽ちせぬのり
法の師のあと

このお歌は、坂東武者熊谷直実(法力坊蓮生)が法然上人のお弟子となり、法然上人御自作の御像を背負って、上人の御両親のお墓に参られた時のお歌です。

法然上人の御両親であります美作の国久米郡稲岡の莊園を預かる漆間時国公と妻の秦氏は、岩間の観音に願を掛け、お母様はある夜、剃刀を飲む夢を見てご懐妊されました。上人がお生まれになった時、庭の棕の木に白い幡が二流れ飛んで来て掛かり、美しく輝いた奇瑞を教えられていた蓮生坊が、その棕の木を仰ぎ見た時の感動と、お念仏の教えは、決して朽ちることがないとの思いで詠まりました。



静岡・網代

教安寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

宗祖法然上人八百年大遠征法要
教安寺開創六百年記念法要

寺院紀行

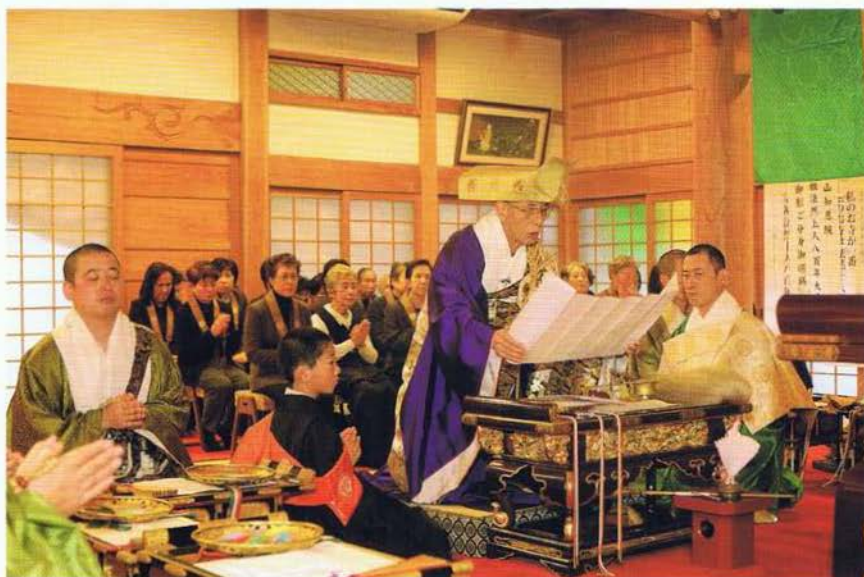
特別編

山腹にあるお寺への坂道を
法然上人ご分身像とともに、
僧俗ともに練り歩いた



檀家さんの担ぐ法然上人ご分身像に続いて導師が続き、向うには伊豆の海が広がる

表白を読み上げられる臈住職、左隣には副住職、右隣にはお孫さんが……



教安寺本尊阿弥陀如来立像



平成二十二年十一月二十八日（日曜日）に静岡県熱海市網代にある教安寺で宗祖法然上人八百年大遠忌法要、教安寺開創六百年記念法要が、教安寺住職臈博之（みかづき はくし）導師のもと盛大に執り行なわれた。当日は熱海市網代公民館から山腹にある教安寺まで、知恩院からお迎えした法然上人ご分身像とともに七十四人の稚児を含むお練り行列が行なわれ、本堂での法話に続いて大遠忌並びに開創記念法要となった。



本尊阿彌陀如来像の前に法然上人像が安置され、法要が始まった



本堂前で、檀家総代さん、詠唱の講員さんたちと記念撮影

法要後、多くの参列者に御礼を述べる跏住職



山腹に位置する教安寺から海を眺める法然上人ご分身像



網代であがった魚は網代ブランドとして東京に送られる

浄土

2011/1月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 静岡・網代 教安寺	撮影=タカオカ邦彦	1
八百年大遠忌特集法然上人	ひろさちや	7
	町田宗鳳	11
	阿満利磨	15
	石丸晶子	19
	石上善應	24
新連載 二十五霊場を歩く		28
2011年表紙の人		31
会いたい人 柳家小満んさん②	関 容子	32
響流十方	林田康順	40
小説快僧 渡辺海旭	前田和男	44
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	56
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	59
編集後記		60

表紙裏・二十五霊場を歩く誕生寺

背表紙裏・二十五霊場を歩く国宝法然上人行状絵図

表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎



八百年大遠忌

特集

法然上人

ひろさちや

石丸晶子

町田宗鳳

阿満利磨

石上善應

法然上人の念仏の 現代的意義

ひろさちや

わが国の仏教は、本質的に「国家仏教」です。六世紀の半ばに、百済くだらの聖明王がわが国の皇室に仏像や經典を伝えて来たのが日本の仏教の始まりです。その最初において、国家对国家の関係で仏教が移入され、それを信仰する者が誰もいなかったというわけですから、日本の仏教はまことにおかしなものでした。そして、以後の律令制国家においては、僧侶は基本的に国家公務員でありました。お坊さんは国家から給与を受け、国家に奉仕するのが仕事です。それが日本の仏教の本質的なあり方だったのです。

国家仏教というのは、文字通りに国家のための仏教です。そして、国家というものは、一握りの為政者、権力者に代表されます。国家のためというのは、その権力者と取巻き連中の利益にほかなりません。その少数者の利益を守る役割を担っていたのが日本の古代の仏教でした。

つまり、そこでは、大勢の庶民たちが無視されていたのです。

権力者からは虫けらのように思われている庶民。貧しく愚かな人々。しかし、本当に救いを必要としているのは、そのような貧しく愚かな庶民です。

そして、そのような貧しく愚かな人々にスポットライトを当てられたのが、われらの元

祖さま、法然上人です。法然上人は、貧窮困乏びんぐうこんぼうの人々、愚鈍下智ぐどんげちの者を救うために、お念仏の教えを説いてくださったのです。わたしは、法然上人は、日本の仏教を、

——「権力者のための仏教」から「貧しく愚かな人々のための仏教」へ——
と、思想のバラダライムシフト（枠組みの転換）をされた人だと思っています。

*

さて、いま述べたことを、現代の世相に照らし合せて考えるなら、わたしたちは仏教を、
——「勝ち組のための仏教」から「負け組のための仏教」へ——
と、転換させねばなりません。それこそが、法然上人の教えに帰ることだと思えます。ちよつと考えると分かりますが、高度経済成長期の日本の社会は激烈なる競争原理が支配していました。すさまじいまでの競争原理が、つい昨日までの日本を支配していたのです。いや、現在も、その残滓ざんさいがあちこちに見られます。

戦後の日本はいちおうは民主主義の国ですから、そこには支配者はいません。けれども、競争原理が容認されると、競争の結果によって勝ち組と負け組が生じます。勝ち組は当然のことに富める者になり、そして権力を握ります。負け組は貧者になり、屈辱の生活を送らねばなりません。

そして、社会の仕組みは、すべて勝ち組の都合のよいようにつくられます。そうすると勝ち組はますます富める者になり、負け組はますます貧しくなります。格差が増大するわけです。

しかも、負け組は、そのような仕組みに対して文句を言えません。文句を言おうとすれ

ば、「きみたちが怠け者であったから、競争に負けたのだ！ 自己責任だよ」と、軽くあしらわれてしまっただけです。黙って引き下がるよりほかないのです。

それが日本社会の現状です。

そのような現状の中に、日本の仏教は立たされているのです。

だから、わたしはある意味では、日本の仏教は危機的状況にあると思っています。このような状況の中で、日本の仏教が勝ち組に照準を合わせて発言すれば、日本の庶民は仏教を見限るだろうと思います。いや、もうすでにとっくの昔から、庶民は仏教を見限っていたとは思えません。そりゃあね、勝ち組の連中は金のかかる葬式や先祖供養もできません。けれども、三度の食事も満足にできない負け組の人たちの身にもなってみてください。そうした人たちに、

「あなたがたの努力が足りないから、そうなったのだ！ 自業自得だよ」

と言つてのけることが、法然上人の教えなんでしょうか!?

わたしは、現代の日本においては、負け組の立場に立って、そこから発言していくのが法然上人の精神を継承することだと思えます。法然上人であれば、きっと愚鈍の人々、貧しい人々、負け組の人たちのための教えを説かれるだろうと信じています。

したがって、勝ち組になれるように一生懸命努力しなさい——と説くことが仏教ではありません。

優等生になる努力をしなさい——と説くのが仏教ではありません。

立派な人間になれ——と説くのが仏教ではありません。

法然上人であれば、劣等生に対しては、「あなたは劣等生のままでいいんだよ。劣等生

のまま、お念仏をお称えしなさい」と言われるだろうと思います。ちょうど室の泊の遊女に對して、「遊女のままでお念仏しなさい」と教えられたように。

立派な人間でなくてもいいのです。そりゃあね、勝ち組の人は金があるから、その金の力でもって立派になれますよ。ただし、この場合の「立派」は、押し出しだけの立派さ、見てくれだけの立派さです。実体はあんがい下劣です。そんな立派な人間でなくてもいいのです。負け組でもいい。ただ阿弥陀仏を信じて、「南無阿弥陀仏」(阿弥陀さん、すべてをおまかせします)と称えられる人間になればいいのです。法然上人はきつとそう言われるに違いありません。

ともあれ、いまこそ、負け組の立場に立つて念仏者が発言せねばなりません。もう手遅れかもしれませんが、いまが残された最後のチャンスです。わたしたちは法然上人のご恩に報いるために、

——「勝ち組のための仏教」から「負け組のための仏教」へ——

仏教の枠組みを変えようではありませんか。法然上人の八百回忌を前にして、わたしはそうのように考えています。

私がお慕いする法然上人



(講談社刊 好評発売中)

町田宗鳳

なぜ小説を書いたのか

このたび、拙著『法然の涙』が講談社から刊行されました。私にとって、初めての小説です。これまで三十冊ほどの本を出してきましたが、小説を書くというのは、それまでの執筆とは、まったく異なった体験でした。

比較宗教学者である私がなぜ小説を書いたのかと言えば、どうしても法然という人物の、人間的な魅力をイキイキと描いてみたかったからです。学問的研究というのは、歴史的な資料に記されている以上のことを憶測することが許されません。ですから、人物描写が立体的ではなく、平面的になってしまいうのです。

私は、そういう制約を超えて、どうしても私の想像力を駆使して、人間・法然を描いてみたかったです。法然さんは、大きな人です。酸いも甘いも、平然と飲み込んでしまうような腹の太さがありました。だから老若貴賤を問わず、あれだけ多種多様な人たちが、その周囲に集まって来たのです。英語というヒューマン・マグネット（人間磁石）です。不思議なお方です。

法然さんには、今でいうカリスマがありました。カリスマというのは、ラテン語で「神

からの賜物」という意味があるのですが、阿弥陀さまが、並はずれてお念仏に熱心な法然さんに、カリスマという人徳を贈られたのでしょうか。

その人徳が醸し出されてくる劇的なプロセスを描くには、小説がいちばんです。九歳の折、大好きだった父親が目の前で殺されるのを見て、どう感じられたのか。その後、あれだけ自分を大切にしてくれた母も亡くなってしまう。そして、あれよあれよという間に、自分の家が没落して消えていく。悲しかったと思います。その悲しみをどう耐えられたのか。仏門に入ってから、苦勞は絶えませんでした。家族の温もりのない世界で、天涯孤独の青年僧として行に励む。真理を見出そうと、万巻の書を読む。それでも、求めるものが得られない焦り。その生々しい苦惱を学問書で描くわけにはいきません。

「艱難辛苦、汝を玉にす」といわれるように、人格を円熟させるのは、逆境です。法然さんも、その逆境を突き抜けて、ついに摂取不捨のホトケに会われる。苦行の念仏が、喜びの念仏に変わる瞬間です。ほんとうに嬉しかったと思います。

そして、その喜びを多くの人々と共有しようと、その後の布教生活が展開していきます。そこに、涙との出会いがあります。地獄のような世に生きて、絶望に打ちひしがれる人々が、涙を流さないはずはありません。位の高き者も低き者も、男も女も、皆涙に暮れるのです。

そういう人たちに会った時、法然さんはいきなりお説教されるのではなく、まず人の哀しみを共感されて、一緒に涙を流されます。そして暫くの沈黙の後に、おもむろに念仏による救いの力を解かれました。そこに、凄く深い人間性を感じます。そういう光景を下

ラマチックに描きたかったのです。

私の好きな場面

自分で書いた小説のくせに、自分でも気に入っている場面が作品の中に幾つかあります。その一つが、十三歳で美作から比叡山に向かわれる途中、難波の四天王寺に立ち寄られ、そこにある悲田院で重病（ハンセン病）患者に出会われる場面です。

最初は、その病気の酷さに顔をそむけられるのですが、はたと思いついて、母親が彼のために日に夜を継いで織ってくれた白絹を切り裂いて、彼らの体に巻きつけます。皮膚が腐乱していく凄まじい悪臭の中で、一人ひとりの患者に包帯を巻きつけていきます。

その時、少年・勢至丸はホトケの声を聞くのです。「人の世の悲しみよりも、はるかに大きい仏の慈悲がすべてを包みこんでいる」と。この場面は、完全に私の創作です。しかし、こういう体験が、生涯のどこかであったと思います。それが、それが専修念仏の原点となっています。でなければ、大慈大悲の救済者・法然は、誕生しなかったはずで

二番目に好きな場面は、やはり何といっても、法然さんの八十年の生涯に、偽りがなかったことを示す臨終の場面です。いよいよ師の遷化が近いと思った弟子たちが、諸仏の来迎を願って、阿弥陀仏の木像を持ち込んで来ます。

ところが、法然さんは「無用なものを置くではない。そこに真身の仏がおわすではないか。この眩しい光が見えぬのか」と言って、宙を指さされます。危篤かと思っていた師匠から、こんなはっきりとした言葉を聞かされて、さぞかし弟子たちは、腰を抜かすほど驚いたことでしょう。

法然さんは、いつも阿弥陀さまと同行二人だったのです。だから、どんな状況において

も、あんなに自信をもって、人と接することができたのです。

最後の最後になって、九条の袈裟を身に着けられる。これも、「自分は、持戒の生活を貫いたぞ」という勝利宣言です。人には、徹底した「許し」を説かれたけど、自分には厳しかったのです。弟子たちは、師の生きざまに厳肅なものを感じて心打たれます。

そして、とうとう息を引き取られるのですが、その時、彼のまなじりから、一条の涙がこぼれおちるのです。それは、「自分は苦勞に苦勞を重ねたけど、こうしてホトケの光に包まれて死んでいける。自分は、なんとという幸せ者よ」という感謝の涙だったと思うのです。

これも私の創作ですが、もしも現場に居合わせたとしても、きっと同じ光景を目にしたにちがいないと確信しています。そして、自分も死ぬときは、法然さんのように死にたいと願うようになりました。

法然さんの真価

私は、法然上人のことを浄土宗の宗祖という狭い枠組みでとらえず、日本国民の誰もが誇りにすべき思想家の一人ととらえてほしいと願っています。

専修念仏という易行往生の道を説くことによって、日本の思想史の流れを一身で切り替えてしまった人物です。これは、偉業です。そして、閉塞感でいっぱいだった平成日本にも、法然のような画期的思想家の登場が待望されます。

メディアは国民をますます悲観主義に煽り立てるような報道ばかりしていますが、そんなものに惑わされず、厳しい状況の中でも、希望を見失わない人間でいたいと思います。悲観は、悲観的現実を呼び寄せるだけです。そういう意味でも、乱世の思想家・法然上人

は、お手本とすべき人物です。

聖書の中に、味わい深い言葉があります。「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」(ヨハネによる福音書1…5)。希望は、絶望の中にこそあるという意味です。

これは、法然さんの「善人は善人ながら、悪人は悪人ながら、生まれつきのままで往生す」という考えと通じます。己の愚昧の中にこそ、救いがあるのです。

八百年大遠忌を迎えて、お念仏にご縁を頂いた私たちはもう一度、法然上人の実像を掘り起し、それを世間に広く伝えていく責任があると思います。(以上)

なぜ法然聖人なのか

阿満利磨

私が、長年、法然聖人に関心を持ち、またその教えに帰依するようになったのは、ひとえに「普く一切を摂せんがために」という、法蔵菩薩の「平等の慈悲」をわがこととして選択され、実践された、その菩薩魂に感動したからである。その集中的表現である『選択本願念仏集』の「本願章」は、いつ読んでも深い感動をおぼえる。

なかでも、その「平等の慈悲」を実現するために、従来の浄土の教えを思い切って単純化する、法然聖人の親切心に心を動かされる。

その第一は、いわゆる「まことの心」(「三心」)の撥無であろう。よく知られているよ

うに、阿弥陀仏の第十八願には、称名の他に、「まことの心」（三心）が求められている。つまり、たんに念仏をするだけでは不十分であり、「まことの心」をもって念仏せよ、というのだ。

しかし、法然聖人は、結論だけをいえば、浄土に生まれたいと思って念仏するほどの人には、「まことの心」は自然にそなわるものだと解釈される。「まことの心」は、ことさらに努力して手に入れるものではなく、「生まれつき」そなわっているのだ、と。

つまり、法然聖人の意図は、念仏から一切の条件をとりのぞき、念仏を称すること自体に、絶対的な価値を与えることにあった。

法然聖人は、このような念仏のあり方を、「すけをささぬ」念仏とよんでおられる。「すけ（助）」とは、頼みとすることであり、たとえば、念仏するにあたって、智慧や戒律、道心、慈悲心などを条件として加えることをいう。法然聖人は、そうした条件を一切否定して、ひたすら、ただ一筋に称名することを求められたのである。

たとえば、法然聖人と明遍僧都との問答には、「すけをささぬ」念仏が端的に示されている。明遍僧都は、「念仏をしても心の散乱が静まらない、どうすればよいのか」と質問する。それに対して、法然聖人はつぎのように応じられた。「散れども名を称すれば、仏の願力に乗じて往生すべしとこそこころえて候へ。ただ詮ずるところ、おほらかに念仏を申し候が第一の事にて候なり」と。そして、「散心ながら念仏申すものが往生すればこそ、めでたき本願にてはあれ」と付け加えておられるのだ。なんとさわやかな、しかも心から頷けるお返事ではないか。

明遍僧都が、心の乱れを問題にしたのは、それまでの仏教が、すべての行の前提として、おのれの心を制御して、瞑想に入することを求めていたからである。しかし、法然聖人は、念仏すること自体が大事であって、念仏するときの気持ち、精神状態を問われることはなかった。いや、妄念や、散乱の心のうちであっても、あるいは慳貪であろうが、無慈悲であろうが、「生まれつき」のままに念仏すれば、だれでも往生できると教え続けられた。

つまりは、称名至上主義の確立である。ここにいたってはじめて、念仏は、職業、性別、老若、貧富など、現世の差別、境遇の違いの一切を超えて、万人が仏となる道となったのである。

加えて大切なことは、念仏は、かならず声に出せ、と教えられている点だ。ここにも、法然聖人の親切心があふれている。というのも、私が声に出して念仏するときこそ、阿弥陀仏は私のなかに存在するのであるから。そもそも、私が声に出して阿弥陀仏の名を称さないかぎり、阿弥陀仏は遠い存在でしかない。阿弥陀仏は「名」となって私たちに関わる仏なのである。

もう少し説明しておこう。念仏は私たちの行為であるが、同時にそれは、阿弥陀仏が私のなかではたらいておられる姿なのである。だからこそ、凡夫である私にも、仏の慈悲行を実践しようという心が生まれる。念仏が仏道となるのだ。念仏は、何かの手段ではない。念仏すること自体が、仏の道を歩むことなのである。

そうした念仏の姿を明確にするために、法然聖人は「念唱是一」と説かれているのである。また、念仏を声に出すことにおいて、かならず往生ができるという思いが生まれる（「声につき決定往生のおもひをなすべし」、とも教えておられるのだ）。

法然聖人が『選択本願念仏集』の冒頭において、「南無阿弥陀仏」をもって往生の根本とすると表明されている意味は重い。

思うに、こうした念仏の単純化は、ひとえに、「極悪最下の人のために、極善最上の法を説く」（『選択本願念仏集』第十一章）という願いに裏付けられているのであろう。「極悪最下の人間」には、複雑にして高尚な行は実践が不可能である。だからといって、質を落とした、簡単にして容易な方法をもってしては、極悪を脱することは難しい。それゆえにこそ、法然聖人は、「勝」にして「易」である行として念仏を選択されたのである。普通にいえば、勝れた行は実践が難しい。実践が容易い行は、勝れた内容をもたない。しかし、念仏は、勝れた内容をもっていて、しかも実践が容易なのである。

かつて私は法然聖人を「日本仏教のラディカル」とよんだ（『法然の衝撃』）。「ラディカル」とは、本質主義者、根本主義者という意味である。

私が注目するのは、右に見た、念仏の単純化・絶対化は、法然聖人が、言葉ではなく、阿弥陀仏の本願の本質を見抜かれていたがために可能となったということだ。しかも、このように、本質をしっかりと把握する立場は、現実には、きわめて柔軟な対応が可能となる。本質を曲げないかぎり、あるいは否定しないかぎり、相手の事情は許容される。だが、一度本願念仏の本質を侵すおそれがあるときには、それは容赦なく否定される。

法然聖人について、世間では、しばしば寛容な人物だとうけとっているようだ。しかし、なぜ、寛容であり得たのか、については十分に考察されているとはいえない。私の見るところ、法然聖人の寛容は、本質主義者であることから生まれているのだ。このことは、法

然聖人を語るときに、もつと強調されてもよい点ではないか。

なぜならば、本質を忘れた言動は、いたずらに八方美人的となり、とりわけ現実の政治体制におもねり、へつらう姿勢が顕著となるからだ。法然聖人はけっして八方美人的に振る舞ってはおられない。本願念仏の本質を見定めておられたからこそ、流罪の憂き目にもあつておられるのである。

法然聖人の教えを受け継ぐとは、その本質主義を受け継ぐ、ということであろう。言葉や形式にこだわっては、本質はぬけおちてゆく。

おわりに、「上人」ではなく、なぜ「聖人」なのか、一言断っておきたい。それは、親鸞が、師の伝記・語録を集めた『西方指南抄』の中で、終始、「法然聖人」と記しているからだ。親鸞に導かれて法然聖人に出遇った私としては、親鸞になりたい。(終)

私が感じる法然上人

石丸晶子

法然上人ものいご在世当時、日本は仏教国家であるとともに、貴族たちの生活のすみずみは「物忌み」ものいや「方違へ」かたがへといった陰陽思想に支配されていた。この二つはきわめて盛んであつた。

ここで「物忌み」ものいとは陰陽道の神々が巡行する方角を回避したり、悪夢や怪異が発生し

たあと、門戸を閉ざして籠居することで、「方違へ」とは外出のたびに吉凶を占い、凶方にあたる場所や方角を避けることをいう。そしてこの場合、わが邸が天一神のいる方角にあたれば、前夜のうちに一度吉方にあたる方角の他家に移動し、そこに一泊して翌日、そこから目的地に出発するのである。

九条兼実の日記『玉葉』や藤原定家の日記『明月記』などを読むと、

「今夜、院（後白河法皇）御方違へと云々」

「関白殿（兼実）、御物忌みと云々」

という記載が頻出していて、現代のわれわれの目からすると、いったい彼らはいつ自分の邸にいるのか、いつ政治家としての活動をしているのかと、はなはだ不思議に思われてならない。

これに加えて、国家の根本をなしているのは南都六宗や天台・真言の、現在旧仏教といわれる信仰思想であった。もろもろのまじないや占い、加持祈祷がさかんであった。

法然上人八十年のご生涯は、保元平治の乱から平家滅亡にいたる戦乱の時代であったが、その戦乱の時代は、また陰陽道と加持祈祷等に根底が支えられた時代であったのである。

今、かかる時代のなかに法然上人を思いうかべてみて、あらためてわたしは、法然上人のあたらしい信仰思想に接した人びとの衝撃と驚愕を思わずにはいられない。

法然上人の語録のなかに、堂上方女房ととりかわされた「百四十五箇条問答」というのが伝わっている。

この問答からは、旧仏教や陰陽道によって生活のすみずみまでを規制されて生きてきた

公家の妻女たちが、法然上人の新しい教えにふれて、心につもるさまざまな思いを次から次へとお尋ねしているようですが浮かびあがってくるが、今、そのなかのいくつかをしるしてみると、

「臭いのある^{にら}葎^しや猪の肉などを食べた後の念仏は遠慮すべきでしょうか」

「懺悔するには^{はだ}幡^{えん}や花^け鬘^{まん}を飾らなければなりませんか」

「妻が男性に^け経^{けい}を習うのはどんなものでしょう」

「心ならず還俗しましたがやはり重罪なのは」

「止むなく魚を捕った場合も殺生の罪になりますか」

「酒を飲むのはやはり罪でしょうか」

「生理のときの読経はやはりいけないと……」

女性たちのこの問いに上人はどうお答えになったか。

「念仏はなににも障るものではありません
ん」

「そうしたことは一切ありません」

「まったく構いません」

「重罪ではありません」

「それは殺生ではありません」

「まことは飲むべくありませんが、この世のならいですね」

「支障があるとは思えません」

かつて亀井勝一郎はこの問答にふれて、

「これは聞き書きのなかの傑作であり、言い回しが面白く瀟洒で、法然は対話と座談の名手であった」と述べた。

また兼好法師は稀代の毒舌家として名高いが、彼は『徒然草』のなかで上人の語録をとりあげ、「尊いおことばだ」「これも尊い」などといっている。

そのおことばには宗教家でありがちな尊大なところや勿体ぶったところ、迷信じみたところが少しもなく、どれもみな、端的にして明快。しかも洞見は深い。

法然上人は鎌倉新仏教の開祖としてつとに名高い。そしてわたしは、法然上人の語りだされるそのおことばが、当時の社会に、いかに新鮮な風を吹き込んでいったかを思う。

上人は呪術やタブーの闇に沈んでいたこの国に、それらを吹き払う清新な風を吹きこんだ方であった。万民に共有される普遍のことばを用いて新しく語りかけ、当時の仏教に息を吹きこみ、いのちを甦らせた方であった。

では法然上人は、どのようにして普遍性を手に入れたのだろうか。

こう問うてみると、わたしの胸に浮かんでくるのは、叡山での二十五年におよぶ、「寝食ままならぬ」苦しい求道の日々である。

上人は九歳にして父を殺され、叡山に上り、天台僧となつてしかし苦惱二十五年。この苦悩が、時代の束縛を超えて万民に通用する普遍的な言葉を、法然上人に与えたのだと思う。

わたしが法然上人のおことばを辿るたびに突きあたるのは、悟りうすき凡人や俗人に開

まれてある聖者の悲しみである。お弟子たちに囲まれてなお、法然上人にはお心の奥の奥にしまわれたこの悲しみがあつたのではないだろうか。

浄土こそが、法然上人にとって真に慕われるみ国であつたにちがひなく、そのみ国に人びとを伴ひ連れていくために、上人は日々、倦まずたゆまずわれら凡人を教え導かれた。

今、もし法然上人が生きておられたとすれば、どこで何をなさっているだろうか。価値観は多様化し、時代がむかつていく先はみえず、てんでんバラバラな大衆社会の現代。

児童や高齢者など、弱者の虐待事件があいつぐ今の日本。

こう問うてみると、わたしにはマザーテレサの姿が思い浮かぶ。

比叡山時代、法然上人は秀才の名を馳せた方であつた。そして下山されたのちは、それまで六百年つづいた日本の仏教を百八十度換えてしまうという、卓越した宗教家であつた。

しかしその法然上人を今の時代に置いてみると、わたしにはいわゆる純粹に宗教活動家としてのお姿が浮かんでこないのである。

マザーテレサはカトリック教会の修道女であるが、半生を貧しい人びと、虐げられた人びとの救済福祉にささげ、どの宗教宗派を信じているか、どんな思想の持ち主かなど、人を差異化する基準をまったく持たなかった。「死を待つ人々の家」にイスラム教徒が運ばれてくれば、彼の安らかな臨終のためにイスラム教の教師を枕辺によび、イスラム教の葬式で彼を彼岸に見送った。仏教徒がくれば仏教の僧侶を招いた。

わたしはここに、普遍にいたった人の姿を見出すのである。

わたしには法然上人とこのマザーテレサが重なってしまう。

私の法然上人

石上善應

昭和五十四年、滋賀県の文化財調査の折、甲賀市信楽町の玉桂寺にあった客仏の阿弥陀如来立像を解体修理して、胎内から発見された古文書類に、一同ただ驚くのみであった。

この阿弥陀立像は像高九八・七センチで、俗に三尺立像にあたる。ヒノキ材で一木割矧造、玉眼の形式であり、胎内文書はびっしりと結縁交名、八卷二冊、結縁交名・名号札・包紙など八十四枚が入っていた。その中心になるものに、建暦二年十二月、源智造像願文があったのである。

法然上人は建暦二年正月二十五日に遷化された。そこで知恩院二世となった勢観房源智上人が、なくなった法然上人の入寂したことを歎き、上人の一周忌に報恩謝徳を思い、道族貴賤、有縁無縁の結縁を募って、百万べん、一万べん、ただ一ぺんの念仏でも、と約五万人の署名を十箇月位で集め、阿弥陀仏像の胎内に納入したものであった。確かに有名な物語者もいるが、そのほとんどが無名の結縁であった。法然上人の教えはいかに広く伝わり、多くの信者がこぞって参加したかを知ることができる、じつに大事な仏像であった。南都北嶺の既成の仏教教団から法然上人はたたかれ、うとまれたであろうのに、一般の信

者は急激に増加していった事実を、この胎内の文書から知ることができたのであった。

その阿弥陀さまが、法然上人八百年の大遠忌を迎えるにあたって、高野山真言宗から浄土宗に戻ってこられたのである。まことに有難いきわみではなからうか。それだけに、単なる遠忌ではない。法然上人が教えられたお念仏を胎内文書で結縁された方々と共に一緒にお念仏をしなければならぬ。八百年のこの時に、心からのお念仏を称えなければならぬのである。十三世紀には、一体どれだけの日本人が漢字を覚え、仏典が読めたであろうか。学者にいわせれば、三割もいなかったようである。お経を読めるものは、きわめて少数であった。胎内文書には、ひらがなで書くものもじつに多いことを知れば充分である。文字も知らない庶民の側に法然上人は立っていた。お念仏は農作業をしていても出来るのである。当時のお寺は氏寺で、氏族は自分の一族の菩提のために寺塔を建立した。

『選択集』第三章段に、「もしそれ造像起塔をもて本願としたまわば、すなわち貧窮困乏の類は、定めて往生の望みを絶たん。然るに富貴の者は少く、貧賤の者は甚だ多し」とあるのはこのことであつた。第二に「智恵高才」の者が往生でき、「愚鈍下智」の者は往生できないのでよい。法然上人はまさに愚鈍なる人間こそ往生すべきであると力説している。『一枚起請文』の精神を思い出すべきである。第三に「多聞多見」の者が往生し、「少聞少見」の者が往生しないならば、まったく、日本人の八割以上の者が往生できないことになる。第四に「持戒持律」の者が往生できるならば、ほとんどの破戒者や無戒なる者は往生できないのでよいのか。無戒なる者は後世、「縁なき衆生は度しがたし」といわれる範疇に入れられる人びとではない。朝早くから夜遅くまで、田畑に出て働く人びとは、ほとんどが当時、小作の人で、一日食べるのがやっとであつたはずである。お寺の近くで話

を聞くひとはまだよいとしても、一般的には、まことに困窮していたはずである。ただで
 きるのは、その田畑で、口でとなえるお念仏という行為であったことになる。勢観房源智
 上人の発願による阿弥陀さまの胎内の文字は、ほとんどが、かな文字で、グループの代表
 格の人がまとめて書いたであろうことが推測される。このような人びとが法然上人を慕い、
 一べんのお念仏でも称えようと、ただ競って結縁交名に名前を届けたに違いないのである。
 当然、法然上人の八十年の生涯の中で、その思いを記しているのではなかったろうか。
 法然上人の晩年であろうが、お弟子の隆寛律師の伝説のことばとして、次のような一文が
 伝えられている。

「源空も念仏の外に、毎日阿弥陀経を三巻よみ候き。一卷は唐、一卷は呉、一卷は訓なり。
 しかるにこの経に詮ずるところ、ただ念仏申せとこそとかれて候えば、いまは一卷もよみ
 候わず。一向念仏を申し候也」

この中で、唐（漢音）、呉音、訓読という三つの種類で阿弥陀経を毎日、法然上人は読
 まれていた。しかし、結局は「ただ念仏申せ」と經典の中に書かれているのだから、今は
 阿弥陀経を一つも読まず、ひたすら念仏を称えているのだと仰せられているのである。こ
 れこそが、民衆と一緒に称える念仏の姿であった。そのことをはつきりと明言されておら
 れることを銘記したいのである。

また、「乗願上人伝説のことば」に、つぎのような一文がある。

「ある人、問うていわく。色相観は、観経の説なり。たとい称名の行人なりというとも、
 これは観ずべく候かいかん」

「源空もはじめはさるいたずら事をしたりき。いまはしからず。但信の称名也」

ある人が法然上人に尋ねた。「仏のすがたにそなわる特徴とその功德を観察する行法は、観無量寿經の説である。たとい、お念仏を称えている方でも、仏のおすがたを観ずるのは、いかがでしょうか」とお聞きした。すると、法然上人は、「私もはじめは、そのようないたずら事をしたものである。いまはそのようなことは一切していいない。ただ信ずる称名のみである」と答えられたという。この「さるいたずら事をしたりき」という言葉の重みを感じとり、「但信の称名」ということの大切なことを、しっかりと体得すべきである。

まさに、法然上人が入寂された直後に源智上人によって発願された念仏交名（念仏人名録）を胎内に臍した阿弥陀立像をもとに盛大に一周忌が行なわれたことであろう。そう思えば、心からのお念仏が八百年後に、盛大に執り行われることを心より念願するものである。

法然上人が「つねに仰られける御詞」の中で、つぎのように述べられていることばをもとにして結びとしたい。

「たとい余事をいとなむとも、念仏を申し申しこれをすると思いをなせ。余事をしし念仏すとはおもふべからず」

念仏の中に生き続けている日常の生活であり、日常の中で、ついでに称えるお念仏ではないということ。

誕生寺

法然の誕生地は美作の国である。

この美作みまさかの中心の町が津山市であり、京都とよく似た町であって、小京都とも呼んでいる。美作の国は今では五郡と三十町村で出来ているが、この小さな盆地は古くから開けていて、弥生式遺跡や、古墳があり、津山市沼には弥生式住居の跡も発見されているほどで、古代からこの地は発展したものだと思ふ。

それであってこそ、この地方には帰化人の集団が住

んでいたのが、最初大和の国に住した帰化人が山城と、この美作に移り、ここでも機を織ることを業として、日本文化に大きな貢献をしたのである。

国道の誕生寺前のバス停留所で降りると、だらだら坂をくだって誕生寺の門前へ、また津山線の誕生寺駅で下車すると、バスの停留所からくる道と一つになる。真正面に誕生寺の山門がみえる。このあたりが法然の出生地である久米の南条稲岡の庄というところでも

ある。その山門の南北の道は延喜式に出ている官道であつて、いわゆる津山街道、あるいは津山往來の道である。この道は北西の山ぎわをまわつて、小原というところで国道につながっている。

山門はなかなかどっしりとしていて格式ある寺を思わすに存分である。

門を入ると正面が本堂である。二重屋根の建造物であるが、特に向拝が高いし、外椽も割合に高い。ここが法然誕生の聖地であると思うと、一本一草にとても親しさを感じずにはおられない。この誕生寺は建久四年（一一九三）に熊谷蓮生が開いたとつたえているが、誕生寺と称していた寺で、法然の父時国の邸宅の跡であるということであつて、たしか本尊のあるあたりが法然出生の場所であると寺伝にある。

本尊はもちろん法然の像であつて、四十三歳の立教開宗の像である。

その同じ脇壇に栃之助とお社の木像が安置されている。この二人は法然の父、時国の家に出入りしていた下僕であるらしい。また法然が勢至丸という少年のころ比叡山に赴くとき、この栃之助が随伴したともいう。

そして比叡山から郷里に帰国した栃之助とお社が、法然の父の邸宅を寺としたという説もあり、誕生寺の山号を栃社山（とくしやま）というのはそれがためであるという。

本堂の参拝を終えて境内に出ると、目につくのは樹齢八百年という銀杏の古木がある。石垣に囲まれたなかに枝を張っているが、その幹を見ていると、なんとも風格がある。

というのはこの古木は、法然が九歳から十五歳まで勉強していた叔父の寺である菩提寺にある銀杏が元の木であつて、この菩提寺を下山して比叡山に登山するとき、菩提寺の銀杏の枝を手折つて杖とし、母のところに立ち寄り、別れの際にその屋敷の庭にこの杖をさしておいたのが樹齢八百年をかぞえる古木となつたので、法然の伝記とともにあつたような銀杏である。銀杏のわくら葉が境内の石畳の上に敷きつめるころは、誕生寺の参拝者も少なくなるころで、境内もしーんと静まりかえるような日もあるが、風に吹き散る銀杏の黄色い葉は、寒々としたなかにも風情があるといえる。本堂の左側にあるのは、法然蓮生の奇跡をあらわす樟の木である。もう二代目のものであらう。

時にあたりて紫雲天にそびへ、館のうち家の西に、もとふたまたにしてすゑしげく、たかき椋の木あり、白幡二流とびきたりて、そのこずえにかかれり。

と四十八巻伝に記している、その椋の木であつて、本堂の本尊安置の場所が、法然誕生の際の居間であるとなると、この椋の木は「館のうち家の西に」ということがあてはまることになる。うっかりしていると、わすれることがあるから、その奥の勢至堂に参詣のときによく見ておくといふ。

椋の木の下の川が片目川で、法然の父時国に夜討ちをした定明が、法然の幼時勢至丸に弓でうたれたとき、矢にあたつて眉間の傷を洗つた川であり、その後この川には、片目の魚が棲んでいるといわれている。魚の見本は宝物館に保存されているからよく見るとよいと思う。

この勢至堂の裏側に、法然誕生の際に産湯をつかつたというとても美しい井戸がある。この井戸の水を使うと、心身の健全な子供が生れるとして近くの女性があつて、法然にあやかろうという心ざしがみられて、あたたかさを感じさすが、水はとても美しくそしてつめたい水である。

その周囲に五輪の石塔が多い。まことに古さびたもので苔むしているが、この辺一帯は昔からの古墳のあともあり、あ的那天年間の誕生寺破壊の際に、廃れた人々の墓であるかもしれないし、そのなかに原田三河守の石塔が残っているのは印象的である。

勢至堂の門の前の左の道をのぼると浄土院がある。誕生寺の山内の寺院になっているが、昔は天台宗の寺であつたのが後に浄土宗になつたので、この寺は法然の父時国と母秦氏の菩提寺であつたことをつたえている。

『浄土』2011年表紙の

人

雲中供養菩薩

(白金・戒法寺蔵)

鈴木禮次郎 仏師

鈴木禮次郎 略歴

仏師・信春の次男として、昭和12年
東京に生まれる。

東京都町田市に在住。

日本芸術院会員・佐藤玄々氏の内弟
子となり、京都・妙心寺山内・大心
院にて、三越本店天女像制作に従事
する。

その後、日本美術院同人・関谷充氏
に師事。

日本美術学校卒

所属団体：仏教美術協会 会員
木 精 会 員



連載

会いたい人
関 容子

柳家小満ん

さん

②



撮影／タカオカ邦彦

小満さんは大学を中退して文楽師匠の内弟子になったわけだが、これまでの生活とのあまりの違いに戸惑うことばかりだった。

「まず早起きですね。おかみさんは九段の芸者屋の娘で、やっぱり芸者で出てた人ですが、喘息持ちで夜寝られないから毎日が不愉快なんです。弟子が毎朝六時にハタキの音をさせないと機嫌が悪い。師匠はそんなおかみさんをけむったがって、食事は別々でした。御飯の炊き方は、師匠が固め、おかみさんが柔らかめがお好きなんです。兄弟子はおかみさんについて柔らかく炊いちゃうのを、師匠はいつも我慢しているんですよ。で、兄弟子が留守であたしが御飯番になったとき、師匠向きに固く焚いて、おかみさんにはお米からおいしくお粥をこしらえました。すると両方喜んでくれて、今日からお前が台所へ立ちなさい、って」

文楽師匠は八時ごろ起床。朝湯に入って一日おきに髭を剃る。好きな義太夫を一段語る

のでかなり長湯。お風呂のあとは仏様を拜んで、それから朝食になる。

「お飲みになりますか？ と一応お伺いを立てると、そりやお前、お約束でしょう。それでいつも菊正宗のお燗酒です。夏場は黒ビールの小瓶で、これがとってもお洒落な感じでした。お刺身は上野広小路の丸市という高級な魚屋に電話しといて取りに行くんですが、それが立派な鯛や平目。師匠はおいしい物を上げるとき、弟子にもちよつとだけ味見をさせてくれます。味わってお食べよ、うまいと思つたらそれが芸ですよ、って。噺家は普段が肝心、落語なんてどうでもいいんだよ、って。つまり、芸でおいしそうに食べてみせるときに、普段本当においしい物を食べてなきゃ、できないってことなんです。そうかと思うと、勉強した者が勝ちなんだよ、ともおっしゃる。まったく別みたいなんですけど、これは抱き合せの教訓でしょうね」

文楽師匠は胡瓜の古漬けを薄く切つてシソ



小満さんの師匠、文案さんが神田明神下の神田川に弟子を集めて義太夫を聞かせていた。写真はおかみさん達が集まる頃のもので、小満さんは後列右から二番目。

の葉や生姜と刻みこむ「かくや」が好きだった、と聞いて思い出すことがあった。私が女学生のころ、大学生の兄とその友人が「かくや」とはどういう字を当てるんだろう、といろいろ言っていたので、私が「隔夜」夜の気分を隔てるんじゃない？　と言うと、出ました、新解釈！　とからかわれた。この際調べてみたら、江戸初期に岩下覺弥が始めたから、と、高野山の隔夜堂を守る老僧のために作ったから、と二説があった。すると私の隔夜説も満更でもなかったらしい。

小満さんは素人の生活とはまったく趣きの異なる文楽師匠の暮らしが、珍しくてならなかった。男が寝化粧をするなんて……と。「師匠は何ごとも嬉しそうにやるんですよ。朱ぬりの鏡台を出して、大紋付の縮緬の座布団の上へステコ一つでチョコナンと座りましてね、よっぽど好きなんですわ、化粧水、レモンクリームとつけて、パウダーはたいて

……どこでもらってきたのかアメリカ製のピンクの薄い缶入りのパウダーですよ。いくらもない髪に櫛を入れて、惚れ惚れと自分のほつぺたを両手ではさんで、『すべすべ、すべすべ』って御機嫌なんです（笑）。年を取ると『汚れ』になりますからね、気をつけないといけませんよ、って言う。しかしじつにきれいなお年寄りで、お供しても自慢なんですよ。銀座の石川テラーでこしらえたイタリア生地のパレザーと替ズボンが気に入っちゃって、そればかり着る。さてどっかへ行こうじゃないかって言われて、当時ハイカラだった六本木のキャンティ（イタリアン）へ案内しました。外人さんがこっち見てにつこりすると、師匠は立ってお辞儀を返して、いいねえ、たまらないねえ、こういうところは、つて楽しそうでした」

小満さんは文楽師匠と深い仲の女の人を一人だけ見たことがあるという。

「大阪の芸者さんで義太夫をお座敷芸にして

た人。粹でも美人でもなくて、おかみさんのほうがよっぽどきれいでしたね。師匠が言うには、いい女には男がいる。いいのはたいてい役者へ行っちゃって、噺家がもらうのはそのおこぼれだ、って。これは思い当りますね（笑）

義太夫に凝るあまり、文楽師匠には落語の『寝床』さながらのエピソードがあるという。一門の噺家を神田明神下の鰻料亭に招き、お膳をつけて義太夫を聞かせた。小勝、小さん、円蔵、三平、円鏡、それに色物の芸人たちが集まって拝聴したが、第二回は欠席者続出で師匠の顔色が変わった。

「小さんは？ 剣道の試合だそうです。円蔵は？ 風月堂のゴーフルを持ってきて、ゴーフルゴーフル（どうするどうする）と洒落を言って帰りました。小勝は？ 半身不随です。三木助は？ 死にました。三平は？ すいません、ってこれ当時われわれの間で流行った小噺ですけどね（笑）。それで第三回からは

一門のおかみさん連中が召集されて、これは互いに競い合って褒めますから、師匠も上機嫌で、今度はうまく行きました」

小満んさんは師匠の芸者遊びのお供もした。

「柳橋だ、赤坂だ、って、師匠がお座敷のかかるところへは行けませんからね。漫才のコロンビア・トップさんから渋谷の丸山を紹介されて、行つてみると小部屋が多くて怪しげなところでしたけど、それでも何人かは三味線の弾ける人もいました。師匠は「有明のお：なんておかみさんから教わった端唄歌うのにも、帳面出さないと歌えないんです。几帳面でしたからね。お前も歌え、って言われて歌いました。『唐午の骨はバラバラ紙や破れてもお：トツテツツツツトツツツトン、チリシャンチリシャンという合の手を弾きながらその人が、へあなた竜宮城の乙姫さん、いいわねいいわね』と歌う。洒落てるじゃないですか。これだな、と思つて、そりや噺の中に入れてますよ。勉強になりました」

そのころ文楽夫人はもう亡くなっていて、師匠はひとり身だった。

「その芸者さんに、長唄は誰方にお習いですか？　って師匠が訊ねたら、芳村伊十郎先生です、と言うのでびっくりです。あの上品な美声で鳴らした恰幅のいい伊十郎さんですからね。脳溢血で倒れて今相模原の病院へ入院なさってますが、よかったら御案内しましょうか、ってその人が。師匠は名人会で何度か顔を合わせてるんですが、でもあたしのような者が伺っていいものかね、って言ってましたけど、結局お見舞に連れてってもらいました。伊十郎さんは病室で長唄のテープをイヤホンで聞いてましたけど、口が思うようにきけなくて涙が先に出てくるんです。うちの師匠も泣き虫だから、お目にかかれて嬉しいですよ、って手を握って泣いてました。丸山へ遊びに行ってもこんないいこともあるんだな、と思いましたね。その芸者さん、なかなか品のいい人でしたよ」

話は戻るが、小満んさんが二ツ目に昇進したのは昭和四十年三月だった。紋付袴も誂えて、入門のときの保証金と寄席の給金をおかみさんが貯金しておいてくれたので、立派に支度ができた。

「二ツ目になって間もなく、すすめてくれる人がいて、上野の本牧亭で第一回小勇の会を師匠のお許しを得て開くことができました。それ以来隔月に一回、現在で二百回も続いています。第一回るとき、楽屋に師匠からビール大瓶一ダースがお祝として届いて、ほかのうちのお弟子から羨ましがられました。師匠は、入りはどうだった？　と心配してくれて。当時踊りとお茶を習ってましたんで、その仲間たちが心配して大勢来てくれました、と言ったら、そうかい、勉強した者が勝ちですよ、って、そのときおっしゃったんです」

小満んさんと師匠との別れはその六年後にやってくる。昭和四十六年八月、国立小劇場で口演した『大仏餅』が最後の高座となった。

生まれ変わっても文案師匠の内弟子をやりたい、という大好きな文案師匠（中央）と一緒に。左が小満んさん。



「肝硬変を患っててだいぶ身体がつかつたんでしょね。もし高座で絶句したらどうしようかと日ごろ考えていたんですよ。勉強し直して参ります、というのはどうだい？」と訊かれて、あ、師匠、それいいですね、そうかい、それで行きやすか、って言ってたんです。その日、前の日に東横で『大仏餅』をやったので稽古をしなかったんですね。あたしが最初に上がって『宮戸川』をやったんですが、師匠はいつも前の人のを脇でお客みたいに笑いながら聞くんです。この日は次の出番が師匠でしたからあたしのを聞いてくれたわけなんです。それで『大仏餅』。元お茶人のお乞食さんが名前を訊ねられて、あたくしは芸門前に住まいおりました神谷幸右衛門：というこの名前が出なかったんです。申しわけございません、勉強し直して参ります。深々と頭をさげてしまったんですね。しっかりと！　なんて客席から罵声が飛んだりして、楽屋中は騒然となったんですけど、師匠は覺

悟の上なので、平気。しごく落着いていて、帰りの車の中ではそのことについてこれっぽかりも言いません。お前の『宮戸川』ね、いずれよくなりますよ、あたしもやりたい嘸だったけど、あたしには『明鳥』があるからね、つて。そんなに似通つてもないんだけど師匠はそう言つて、あたしが『宮戸川』やるんならとあつたためたくすぐりがあるんだよ、つてそれ教えてくれたんです。それ、やつてますよ。あたしの宝ですよ」

『宮戸川』は、夜遅くなつて家を閉め出された半七が泊めてもらいに伯父さんのところへ行くと、近所の娘お花もあとからついてくる。早トチリをした粹な伯父さんが二人を二階へ上げて梯子を外してしまい……という嘸。

「半七の野郎はいつも碁だの将棋だので閉め出されやがつて、俺なんかと来たらもててもてて、と言うとおばあさんがふくれるんで、安政二年の話ですよ、というくすぐりを教えてもらいました。あたしは更にそれをふくら

まして、戸口を開けると若い二人が立つてゐる、あ、安政二年にとりかかりやがつたな、というのを入れてやつてゐるんです」

文楽師匠はその年の暮れ、七十九歳で亡くなった。

「あたしは神谷幸右衛門という名前をいろんな嘸に使つてます。『三十石船』の船に乗る人の名前の帳付けをするときなんかに、師匠の記念として使うんです。内弟子に入つたときはつらいことも多くて、逃げ出そうかと思つたこともありましたが、今はもう一度生まれ變つても、また文楽師匠の内弟子をやりたいな、と思つてます」
(つづく)

※小満ん師匠と関谷子さんの出会いとなつた『日本の囃——堀口大學問書き』が、この度三十年ぶりに岩波現代文庫で復刊されました(定価一二二〇円十税)。

跡を一廟に占むれば、遺法遍ねからず。予が遺跡は、諸州に遍満すべし。故如何となれば、念仏の興行は愚老一期の勸化なり。されば、念仏を修せん所は、貴賤を論ぜず、海人・漁人が苦屋までも、皆これ予が遺跡なるべし。

（御遺跡の事につき法蓮房に示されける御詞）

遺跡を一カ所に定めてしまうと、遺された教えが遍く広まることはないでしょう。私源空の遺跡は、日本中、至るところにあるのです。なぜならば、お念仏を興隆していくことが、私が、生涯をかけて努め広めてきたことだからです。ですから、お念仏の声するところは、身分の高い低いに関わらず、たとえば漁師の苦ぶきの小屋にいたるまで、どこもみな私の遺跡となるのです。

法然上人八百年大遠忌を迎えて——お念仏の声を法然上人に届けよう——

新年あけましておめでとうございます。今年、平成二十三年は、建暦二（二二二）年正月二十五日、八十歳で往生を遂げられた、浄土宗祖・法然上人の八百年大遠忌を迎えます。昨年二月、大遠忌を迎えるにあたり、大変嬉しいニュースが飛び込んできました。滋賀県にある高野山真言宗玉桂寺に所蔵されていた木造阿弥陀如来三尺立像（国重要文化財指定）が浄土宗にお戻りになったのです。このお仏像は、昭和四十九年、文化庁による調査の際、玉桂寺地蔵堂の客仏として発見されました。その後、専門的な調査の結果、仏像の胎内に納入されていた建暦二年十二月二十四日の日付のある造立願文（仏像を制作する経緯や願主の誓願が記載された書）から、法然上人の後を承けて知恩院第二世となられた源智上人が、師法然上人への報恩謝徳のため、その一周忌を期して慶派の仏師に制作を依頼した仏像であることが判明したのです。そればかりか、仏像の胎内からは、全国に広がるお念仏の同志に呼びかけて、仏像造立への協力を仰いだ四万六千人もの方々の名前が記された結縁交名（名簿）も発見されました。今から八百年前、車も飛行機も、テレビも新聞もなかった時代、北は東北から南は九州まで、わずか十一ヶ月程の短期間に四万六千人もの方々の結縁交名が集まったという事実には驚愕の念を禁じ得ません。

平安時代後期、時の為政者たちが、雄壮な伽藍がらんを誇る大寺院を競って建立していた時代、法然上人は浄土宗を開宗されました。上人は、身分の高い人も低い人も、智恵深き人も浅き人も、富める人も貧しき人も、ただひたすら「南無阿弥陀仏」とお念仏を称えるだけで、すべての人が平等に阿弥陀さまのお浄土に往生できると提唱されました。そして、誰もが修められる易しいお念仏こそ、阿弥陀さまご自身が浄土往生のために誓われた唯一の行であり、他の諸行の功德が足下にも及ばない勝れた功德を具えた行であると明言し、それまでの仏教界の常識を根底から覆されたのです。それは権勢を誇るひと握りの特権階級の人々の仏教から、すべての人々が救われる仏教への大転換でした。

しかし、法然上人によるこうした画期的な主張は、旧来の仏教の常識に留まっていた人々にすれば、これまで自身が長きにわたり積み重ねてきた善根功德が否定されたと受け取られかねません。そうした鬱積うっせきした批判が爆発することとなったのが、浄土宗教団に対して激しい弾圧が加えられた建永の法難です。法然上人ご自身も七十五歳という高齢にもかかわらず、讃岐国（現在の香川県）に流罪となりました。しかし上人は、この流罪を地方の人々にお念仏を説き広める好機を与えてくれた朝恩と受けとめ、行く先々で人々にお念仏を教化され

たのです。京洛に入れるお許しが与えられたのは、上人七十九歳、建暦元年十一月のことでした。翌建暦二年正月三日、上人の高弟である信空上人が、体調の優れない法然上人に「古来、高僧方はどなたにも、弟子に残された遺跡寺院がございます。ところが上人は堂宇の一つもお建てになっていません。上人が往生された後は、残された私たちはどちらをご遺跡とすればよろしいのでしょうか」とお尋ねになりました。このお尋ねに対する法然上人のお答えが「念仏を修せん所は…皆これ予が遺跡なるべし」という冒頭のお言葉です。このお答えからわずか二十二日後、法然上人は往生の素懷を遂げられたのです。

すべての人々が救われる法然上人の教えが、またたく間に人々に広まったことは、わずか十一ヶ月程の短期間に、源智上人の呼びかけに応じて四万六千人もの方々が結縁されたという事実が証明しています。源智上人発願の阿弥陀仏像は、法然上人のご遺跡たるお念仏の第一次結集と言えるのかも知れません。法然上人八百年大遠忌にあたり、浄土宗では、各総大本山をはじめ、全国各地で法然上人への報恩謝徳の法会が勤められます。私たちも、この勝縁にめぐり会えたことを素直に喜び、お仲間と共にその法会に結集し、法然上人に届くよう、しっかりとお念仏を称えさせていただきますしよう。

合掌

(林田康順)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第二十回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり
教育こそ国づくりの基



新旧二つの顔もつ

欧州の十字路、ストラスブルク

明治三十三年薫風かおる五月、渡辺海旭は祖国・日本を立、船と鉄道を乗り継いで、三ヶ月後の盛夏、留学の地、ドイツ帝国はライン河畔の古都、ストラスブルクに到着した。当時、極東の島国で知られていた欧州の町といえば、イギリスはロンドンかフランスはパリ、ドイツはベルリン、オーストリアはウィーンぐらいだった。それぞれ人口が、東京の百五十万人に対して、ロンドン六百万、パリ三百万、ベルリン二百七十万、ウィーン七十万の大都会。かたやストラスブルクは十万人を超えたばかりの小都も小都。海旭が生まれ育った浅草区とおつつかつだった。選ばれて留学するようなエリートたちの間でも知る人はほとんどなかった。欧州航路の船中でも、行き先を尋ねる乗客に、「そのストナントかほどの国のどこなのか」「そんな誰も知らない町へ何しにいくのか」と訝しがられたものだ。

海旭も事前にいくらかでも予備知識を仕入れておこうとはしたが、仕入れようにも周囲にはストラスブルク帰りはおろか、ストラスブルクを知る者もおらず、諦めざるを得なかった。とにかく仏教の原典と研究者が世界で一番揃っている大学はどこか、それを宗門の情報網で探してもらったところ、それは東洋の島国にも令名がとどろいており、多くの日本人留学生があこがれるイギリスのオックスフォードやケンブリッジでも、フランスのパリ大学でも、はたまたドイツのベルリン大学でもない、ここストラスブルクの大学だと判明。それが海旭を引き寄せた唯一無二の理由だった。欧州の大都市のように多くの日本人留学生仲間がいるわけではないので、正直なところ心もとなかった。出国前に紹介された唯一の伝手は、一年前に東京帝国大学医学部からこの地に留学している海旭より六歳年上の足立文太郎だった。

パリから列車にゆられて十余時間、旧市街の北はずれにある中央駅に降り立った海旭を、その足立が迎ええてくれた。「渡辺海旭です。

よ、よろしく、お、お願いします」と緊張のせいで生来の吃音をつのらせながら合掌してあいさつした海旭に、足立は人体の解剖標本図版を満載した分厚い本を繰りながら、上目ごしに目礼をするだけ。学者肌の変わり者、これが海旭が足立に抱いた第一印象だった。医者と坊主、どちらも人の生き死にかかわる商売。これも仏縁だと自らに言い聞かせながら、しばらく厄介になる足立の「下宿」へと向かった。

これが便利だと言われて路面電車に乗せられた。足立によると、当地では ترام という、ヨーロッパ初の公共交通システム。当初は蒸気機関車に引つ張られていたそうだが、いまは電気仕掛けだ。二十年ほど前に建設がはじまり、今や市街を四通八達するストラスブルクの新しい景観になっているという。日本でも十年前に東海道本線（東京―神戸）が全線開通、東京から神戸まで二十余時間で行けて、これぞ脱亜入欧・文明化の証と新聞もこぞつてもてはやしたが、どうも岡蒸気は好きにならない、パリからここまでもそうだが、ぜい

ぜいと煩い音をたてせかせかと走るものだから、時間の節約にはなるが、そのぶん大事な何かを見落としてしまいうさだ。その点、路面電車は、静かゆったりしていて、街のたずまいも歩く人の表情もわかるので好ましかった。

遠くにひとときわ高く天を衝く尖塔が見えた。「ひよつとして、あれが文豪・ゲーテ翁を「荘厳なる神の木」と絶賛せしめたノートルダム大聖堂ですか」と訊ねる海旭に、足立は大きくうなずくと「百四十二メートルもあって街のどこから見晴るかすことができます」。海旭は、これを頼りにすれば迷子にならずにすむぞと思いつきながら、車窓に現れては消えてゆく年代物の商家や教会に、「どこか京都に似ている」とつぶやいた。

あれは三年前、宗門の会合で京都の知恩院と母校の浄土宗学本校を訪ねたときだ。できたばかりの市電をためしてみた。京都の連中は、やれ本邦初だの、東京はまだまだ先だの（実際に上野―品川間に市電が走るのは六年後の明治三十六年のことだ）とさかんに自慢、

京都人は古いものも大切にする半面で新し物好きだと知った。海旭はこのときの寺と町屋のたたずまいの中を走る市電の光景を思い出して、ストラスブルクと京都を重ねたのだった。

と、路面電車は運河を越えた。「ストラスブルクは、ライン川の支流イル川に浮ぶ二キロ四方ほどの中州につくられ、運河は街を囲み貫く血管のようなもの、そこからすると、この街は水都・大阪の一面ももっているかもしれない」と相変わらず学者然とした他人行儀の説明を続ける足立に、運河を血管にたとえるととはさすが解剖学者だと感心しつつ、江戸っ子の海旭としては、いやいや東京だって規模は小さいが舟船が行きかう濠堀があるぞと言いつ返しそうになって飲み込んだ。飲み込みながら、この遠い異郷の地をやれ京都だ大阪だ東京だとなぞらえることで、にわかに親しみがわいてきた。

そもそもストラスブルクはアルザス語で「道の砦」を意味し、古くから交流と争いが繰り返されてきたヨーロッパの十字路である。

十世紀にローマの影響下を脱してからは、独自の争奪の地となり、海旭が留学したときは、普仏戦争で勝者となったドイツ領。路面電車をはじめ新しい町づくりがすすめられて仕上げの時を迎えていた。ストラスブルクは、折しもパリ万博で世界に存在感を示しつつある宿敵フランスをはじめ欧州新秩序にむけてドイツ帝国の威信を誇示する玄関口でありショーウィンドウであった。まさに海旭は、ナポレオンのフランス帝国が残した街と鉄血宰相ビスマルクのドイツ帝国がつくり上げた街、この新旧二つのストラスブルクに出会おうとしていたのである。

ノートルダム大聖堂の 賑わいに仏教再生を誓う

街の中心部に入るにつれて、尖塔はどんどん背丈を伸ばして、ついに車窓からはみ出てしまった。せっかくだから大聖堂を見ていこうと下車。いやはや巨大だ。身体を大きくのけぞらさないと天辺を確かめられない。これまで海旭が体感した一番高い建物といえ

十年前浅草に文明の象徴として鳴り物入りで建てられた十二階建ての凌霄閣だが、たしかあれは百七十三尺(五十二メートル)だから、その三倍もあり、どおりで見上げる首が痛くなるわけだ。これだけのものを完成させるのに二百年も要したというのもうなずける。キリスト教、とりわけカソリックの教会には威圧的で違和を覚える海旭だが、この大聖堂は地元産の砂岩を用いた赤茶けた外壁がわびさびた風情を醸していて親しみがもてた。しかし、外形の風情もさることながら、善男善女が群をなしてひきもきらず詣でていることに海旭は、「耶穌教もなかなか興隆のようだ」と感じ入った。それにひきかえわが仏教の寺はどうだ。江戸時代は参詣客がひきもきらずと聞かされたが、御一新の廃仏毀釈以来、衰退著しい。浄土宗をはじめ伝統仏教の起死回生が自分の留学にかかっていると改めて感じ、海旭は口元をきつと引き締めた。

ここからは歩こうかとさそわれて、大きな広場にでた。どうやらここが街のヘソらしい。増上寺の境内ぐらいはあるだろうか。真ん中

には皇帝ウィルヘルム一世の騎馬像。周囲には三つの石造りの荘重な建物、皇帝宮殿と政庁舎と大学図書館が屹立。いずれも三十年前このアルザスの地をフランスから奪い返した戦勝の証として立てられたものだ。足立の説明で海旭をもっとも感銘させたのは、大学図書館だった。それも建物自体でなく蔵書だ。先の普仏戦争においてドイツは一夜の砲撃で大学図書館ごと四十万冊の蔵書を焼失させてしまったが、占領後、これを建て直すとともに焼失分を遥かに超える百万冊の充実をはかったというのだ。海旭はドイツの文化教育への高い識見に感嘆するとともに、では自分が通うことになる大学はどこにと聞くと、広場から東へ向かうメインストリートのつきあたりだという。そこへ向けてそぞろに歩を進め、議事堂、郵政庁舎など官庁街をやりすごすと、足立はやおら足をとめて、右手の建物を指差した。

「オペラ座です。さしずめ歌舞伎座ですか。渡辺くん、歌劇はいがかですか」と足立の口ぶりがこれまでの学者然とした説明調からに

わかに柔らくなった。

よほどオペラが好きだと見える。第一印象は研究一途な堅物と思われたが、案外、世知に通じた男かもしれないと海旭は好感を抱いた。「ぜひ、本場でワグネルの歌劇を見てみたいと楽しみにしております」。海旭の口ぶりも吃音が消えて滑らかになっていた。

「ほう、坊さんがオペラがお好きとは」

「もともと仏教に歌舞音曲はつきものです」

「ではこっちはどうです」と足立は片手で杯の形をつくって口元に掲げると、「ドイツはビールがうまいといわれるが、ここはワインもうまい」

オペラだけでなく酒も好きとは。これは気があいそうだと感じながら、海旭もいっそううちとけた口調で返した。「ぜひ、ドイツの般若湯を味わってみたいものです」

「なんと。では、近々ごあいさつ代わりにオペラを見て大いに飲み交わしますか。それにしてもさばけたお坊さんですな。ところで女性は何？」

解剖学者の癖がでたのか単刀直入な斬り込

みだった。海旭は、故国を辞すときに、仏教改革運動の同志・高島米峰に返したのと同じせりふをはいた。「生涯女はやりません」

「私も日本に嫁と子供二人をおいてきているので、女はやりません。お互い堅物同士、うまくやれそうだ。長のお付き合いをお願いします」

このやりとり二人は笑いを爆発させ、道行く人々を大いに怪しがらせたが、これで一気に打ち解けることができた。日本人どころか東洋人を見かけることもなく、紅毛ばかりで不安にかられていた海旭だったが、百万人の友を得た気になった

と、つきあたりに左右に翼を広げた巨大な鷲がいた。そう見えたのがストラスブルク大学の本館だった。建築には詳しくない海旭だが、足立によると、新しい為政者の威風を示さんとする赫々たるドイツ様式の粋を凝らしたもので、竣工して十年ほどだという。

本郷にあった博文館書店で小僧をしていた頃、毎日のように道路をはさんで反対側の東京帝大を眺めては、煉瓦づくりの威容に圧倒

されたものだが、これにくらべれば天下の帝大も納屋だった。すかさず、足立がこう補足した。「渡辺くんもいずれ感得するだろうが、この大学は建物もすごいが教授陣もすごいぞ」

ここなら腰をすえてじつくり十年は学べそうだった。

同居人と日独教育論を大いに論ず

海旭が落ち着いた先は足立の「下宿」であった。下宿といっても、大学そばに数年前に建てられた煉瓦造りの六階建てで、浄土宗本校の木造寄宿舎とは大違い。水洗便所に風呂付のこれぞ文明住宅というべきものである。しかし海旭を感動させたのは、文明的な機能よりも眺望の絶佳であった。西向きの一室で、眼下は大学の植物園、うっそうたる木々の合間に水鳥が遊ぶ池を見下ろし、そのはるか先にノートルダム大聖堂の高塔が雲霧の中に望むことができる。圧巻は太陽が塔の右に没する夕暮れ時で、その筆舌に尽しがたい情景をかつて主筆をつとめた「浄土教報」にこう書

き送ったものだった。

「紺紫青白色々の雲が錦紋の如く大空を彩る間に屹然として立てる古塔は黄金の光につつまれて何とも言はれぬ崇高美妙の感がある。(そこで) 吾が楼を日想観楼と命名した」と。

この日想観楼に居を定めると、海旭は宗門の興望に應えるべく、旬日をおかず大学で比較仏教学の泰斗・ロスマン教授に師事、サンスクリット、パーリー、チベットなどインド周辺の仏教原語を学び、満を持して、仏教研究に没頭した。ほとんど日想観楼と大学を往復し、朝から晩まで「古梵経」と格闘する日々で、唯一の息抜きは、同居人の足立文太郎との談笑だった。

ようやく留学生生活も「日常」になったある日、足立を相手に、ご当地のアルザスワインを酌み交わしながら会話を交わした。この夜のテーマは日独比較だった。

海旭がまず口火を切った。「足立さん、ドイツの勢いは目を見張るものがあるが、これを殖産興業と富国強兵のおかげだと、我が国もそれに学ぼうとするのは皮相の考えではな

かろうか」

「そのとおりだ。日清戦争に勝って列強の仲間に加えてもらって、兵隊はずいぶんと赤ひげたちの肝を奪ったけれども、学問とくるとさっぱりだ」と足立は読みさしの人体解剖図の大著を脇におくと、膝を叩いた。二人は意気投合し、たちまち談論を風発させた。いわく、

「一個人でも教育のない輩は社会で評価が低い。それと同じで、いくら腕力や金があっても、国として立つにはそれだけの学問を備えていなければ馬鹿にされことを免れない」

「これでは国家としての品位体面は前途尚遠しという感じだ」

「やっぱり学問だ、教育だ。それも実学ではない、人間の根本にかかわる学問が肝要だ」

たしかに鉄道や軍艦づくりのための技術は必要だが、そればかりを学問だというのはとんでもない考え違いだ、と足立は力説した。そうした実学をもっと根本のところで支えるもの、百年も二百年も価値をもつもの、すなわち学問の中の学問を大切にせねばならない

と。

足立は、東京帝大医学部で解剖学の權威・小金井良精の授業を受けたときに、骨の話ばかりに疑問を抱いて恐れを知らずに質問をぶつけた。「人種によって骨が違うということ」は理解できました。しかし、骨以外に、見た目にも異なる皮膚、目、顔など、色や形の違う部分は、皆切り捨てられている。どうして他の異なる部分は研究されていないのか」と。すると小金井から「大変良いところに気がついた。お前はそれを研究しろ」と言われ、世界全人種の人体の骨を除いたすべてに及ぶ膨大かつ地味な研究を志し、渡独。そもそも解剖学自体が医学の中の根本学問だが、その解剖学の中でさらに根本のフロンティアをめざそうというのだ。これを知って海旭も「その志やよし」と足立に親近感と尊崇の念を覚えていた。

「一年先輩の経験から言わせてもらおうが」と足立はいった。「私のような根本学問を心おきなくやらせてもらえる国は、ドイツをおいて他にない。ストラスブルク大学の解剖学は、

施設も指導教授陣もいうことなしだ。渡辺くん、君の研究分野はどうかね」

「僕の師事するロスマン教授は、仏教をふくむ比較宗教学では今般望みうる至高の碩学です。先生はケンブリッジに留まるよう慰留されたようだが、招かれてやってきた。僕はこの地で学べる幸せを日々実感しております」

「そのドイツにくらべるとわが日本は……」と話題は大学・教育事情の日独比較へと移った。どちらからともなく、こんな故国への不満が口をついた。

「お抱え外国人もけっこうだが、やはり二流三流はいなめない。しかも実学に傾きがちだ」

「ドイツは世界中から優秀な学者がくるだけでない。学生たちも優秀だ。即座に万国学生会が組織ができる。そして、英国人はケンブリッジのここがすごい、米国人は米国人でハーバードがどうのと、たちまちお国自慢だ。」

「一等国になったといっているが、では東京帝大に、慶応義塾に世界中から学生があつまって万国学生会があるか。それからして日本は学問的にはまだまだだ」

「ただし学問を重んじるのはけっこうだが、行き過ぎもある」と足立が水をさした。けげんな顔をする海旭に足立はつづけた。「渡辺くん、学生の立小便御免だよ」

「なるほど。僕もあれにはおどろいた。日本だったら、すぐに警官がやってきて薩摩弁で、おいこら、なにをしちよるかと言論だ。ところがここでは学生はお目こぼし。たしかに行き過ぎだが、それだけ学生と学問が大事にされている証しなのだろう」

とオチがついたところで、足立が明日は朝から解剖というので、恒例の談論は「お開き」となった。

自室に戻った海旭は、足立とのやりとりを反芻した。ドイツの端倪すべからざる繁栄は、学問と教育のお陰である。わが日本も大いに学ぶべきだ、と。そして日記にこうしたためた。

「学を修めて帰国せし時は、我が国教育のため、吾が微身を捧げん」

(この項つづく)

謹 賀 新 年
平 成 二 十 三 年

大本山 増上寺
法主

八木季生

大本山 百萬遍知恩寺
法主

服部法丸

〒606-8225
京都市左京区田中門前町一〇三

大本山くろ谷金戒光明寺
法主

高橋弘次

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

宮林昭彦

鎌倉市材木座六、十七、十九
TEL 〇四六七（二二）〇六〇三

浄土宗宗務総長

里見法雄

法然上人御誕生地

美作 誕生寺

〒709-3602 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL 〇八六七（二八）二二〇二
FAX 〇八六七（二八）二二六二

函館 称名寺

〒040-0055 函館市船見町十八、十四
電話 〇一三八（二三）〇五七四

(学)大乘淑徳学園理事長
淑徳大学学長

長谷川匡俊

〒174-8645 東京都板橋区前野町五、五、二

学校法人 淑徳学園

理事長 麻生諦善

淑徳SC中等部・高等部

校長 大島謙

塩竈市
雲上寺

東海林 良雲

本應寺

熊谷靖彦

〒844-1411 嬉野市塩田津中町

謹 賀 新 年
平 成 二 十 三 年

学校法人佛教教育学園
学校法人東海学園

理事長
水谷幸正

大鹿山弘経寺住職

金田進徳

〒302-0023 茨城県取手市白山二、九、一二八

愚鈍院 こつぶがや文庫主

中村瑞貴

〒984-0051 仙台市若林区新寺三、十一、十七

吞龍上人祈願所

十八機林堂会

蓮馨寺

住職 衆原恒久

〒350-0066 川越市連雀町七、一
電話〇四九(二二二)〇〇四三
FAX〇四九(二二六)〇六七六

養運寺

田中光成

〒194-0032 町田市本町田三六五四

赤坂六地藏尊

浄土寺

〒107-0032 東京都港区赤坂四、三、五
電話〇三(二五八三)三六三〇

明福寺

福井豊信

〒132-0013 江戸川区江戸川三、八、一

鶏頭山安楽寺

飯田實雄

〒399-4115 駒ヶ根市上穂栄町九、五
電話〇二六五(八三三)二二六〇

清水湊

忠高山
實相寺

〒420-0839 静岡市葵区鷹匠
二丁目二四番十八号

玉桂山
華陽院

電話〇五四(二五二)三六七三
FAX〇五四(二五二)三六五六

勝願寺

〒365-0038 埼玉県鴻巣市本町八、二、三一
電話〇四八(五四一)〇二二七

お骨仏の寺

一心寺

〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪二、八、六九
電話〇六(六七七一)〇四四四

謹 賀 新 年
平 成 二 十 三 年

白本尊阿弥陀如来

静岡
宝台院

住職 野上智徳

〒112-0002

東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山
傳通院

電話〇三(三七八一四)三七〇一(代表)

定義如来

極楽山
西方寺

〒989-2213

仙台市青葉区大倉字上下一
電話〇一(三九三)11011
HomePage: <http://www.johg.or.jp/>
E-mail: sahouji@johg.or.jp

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

宗祖法然上人八百年大遠忌を機に
輝く浄土宗を期待します。

九品阿彌陀如来

淨眞寺

〒158-0083 世田谷区奥沢七・四一・三
住職 清水英碩

願行寺住職

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川二・一・一二

大吉寺住職

成田昌憲

〒154-0017 世田谷区世田谷四・七・九

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016 鎌倉市長谷四・一・二八
電話〇四六七(一一)〇七〇三
FAX〇四六七(一一)五〇五一

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四・一二・八

光取寺

大室了皓

〒141-0021 東京都品川区上大崎一・五・一〇
電話〇三(三四四二)八三八四

浄土誌上句会

●越

〈特選〉海越える送電線や島小春

西井 正

送電線が向かいの島へゆつたりした弧を描いて、海を越えていく。電気のない生活は考えられない世の中だが、離島にとっては殊に需用は大きいのだろう。何本かの送電線は、島にとってまさに命の綱である。

〈佳作〉有り明けの白波越えて冬燕

河合富美枝

月島は見越しの松の手入れかな

井口 吾郎

年越せば我に六度の兎年

浜口 佳春

●島

〈特選〉鷹飛んで潮のにおいの佃島

一橋 哲平

佃煮の名が示すように、佃島は江戸時代から漁師の島だった。今は他の島とつながって、宅地化が進んでいるが、それでも潮の

匂いからは離れないのだろう。ゆつたりと鷹の舞う空もまだ残っている。

〈佳作〉

大根を蒔く半島のつけ根かな

斉田

仁

船尾より島の時雨を見ておりぬ

紺野

敬

無人島村は総出の浅蜷掘り

石原

新

●自由題

〈特選〉
運動会漁師の釣りし庭箒

宝釣りは運動会に付き物の花形の一つである。釣りが専門の漁村の運動会といっても例外ではない。むしろ面白がつて参加するのだらう。一人の釣った庭箒が面白い。ひらひらさせながらゴールに走り込むのだ。

〈佳作〉

どの部屋も喪服を畳む冬の宿

鳴沢

恵

北の窓塞ぐ骨董書画その他

今西

善吉

老いたれば薄味に慣れ凍み豆腐

山口

信子

増田 信子



浄土誌上旬会の お知らせ

兼題
季節ではありません

八年 自由題

誌上旬会へ編集部選

■越

結界を越えて冬蝶弥陀のもと
荒波を越える人生冬荒るる
へなへなの越南製の冬帽子
越中に時雨れ越後に雪となり
宵越しの粟しか出ない背広かな
越して来し田舎暮らしや豊の秋
越冬のつばめ空家に海の音
霧越えて運河を越えてハーモニカ

■島

晩秋の孤島吹きぬく風の色
初島へかもめ添いくる小春かな

佐藤雅子

工藤浄真

斉田 仁

目黒 裕

内藤隼人

井村善也

中嶋いづる

新垣愛子

佐藤雅子

河合富美枝

締切・二〇一一年二月二十日
発表・『浄土』二〇一一年四月号

選者・増田河郎子(『南風』主筆)
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。
●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上旬会係

■自由題

天空に雪晴一島利尻富士
秋麗島から島へ歩きけり
石川島播磨重機に冬の月
秋晴の越中島に奇想あり
ふり向けば島から島へ秋の虹
紅葉かつ散る父島の写真館
長き夜の旧友に会う島の宿
冬麗や三島由紀夫の太き眉
台風の影響らむや島の歌
セイタカアワダチソウあの島もこの島も

工藤浄真

井口 栞

小林苑を

月島恭子

中嶋いづる

内藤隼人

井村善也

井口吾郎

笠井亜子

目黒 裕

佐藤雅子

河合富美枝

工藤浄真

宮崎 透

武藤 滋

飯島那美

辰野麻里

遠山史郎

秋山由香利

山口信子

石原 新

東 保

吉崎美和子

中村真一

寺下忠至

船歌を川面に流し白秋忌
岩陰に亀ゆらゆらと水澄める
風花の無言の便り亡母のかほ
抜けられぬ私道でしたか冬うらら
寒燈や救急棟の出入り口
港絵の橋に小春日小学校
冬薔薇校舍に女声二部合唱
手袋に残るぬくもり分厚かり
木枯しの演壇に置く古ビアノ
車庫の屋根登りつめたる葛若葉
芒野のきらめく風に躰きし
寄付名の太きテントや秋祭り
今朝の冬ホットミルクのうすき膜
秋日濃し猫のねそべる漁師町
切れ端も松茸として香りけり

さっちゃんはネッ

かまち♡ふくら



年明けて淑気のなかの大遠忌

岱潤

宗祖法然上人は、建暦二年（一一二二）正月二十五日、八十歳にて往生を遂げられました。今年はいよいよ八百回御忌に正當いたします。

また、本誌月刊『浄土』も、本号をもちまして通巻八五〇号となります。

本誌が生まれましたのが、昭和十年（一九三五）五月。その後戦争中も発行続けたものの、昭和二〇年三月号は刷り上がった印刷所で空襲に遭い、すべて焼尽と化してしまつたそうです。その後一年間休刊を余儀なくされた時期はありましたが、諸先輩のご努力により、今日まで実に七

五年間発行続けた月刊誌は、全国の刊行物を見ても稀なものと言えるでしょう。

現在大本山の御法主になられた宮林台下を始め、すでにご遷化された成田台下が若い時代、本誌の編集に、また発送にふん骨されたお姿を想像するとき、歴史の尊さを感じざるを得ません。

この会が地道に続いてきた理由は、やはり「鑽号」という名前に秘められた意味深さがあるからだと思うのです。「鑽号」ではなくあえて「鑽号」の字を持ちうるのは、法然上人という偉大な人格者に対する時も、決して盲目的にならないという、自戒の心が働いている証でしょう。我々にとって法然上人は尊敬の対象

であり、信仰の対象とするのは、あくまでも法然上人が信じた阿弥陀仏であるということです。この見極めが実は信仰集団にとって、とても大事なことだと思うのです。（長）

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

七十七巻 一月号 頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十二年十二月二十日

発行 平成二十三年一月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三（五七）八六九四七

FAX 〇三（五七）八七〇三六

振替 〇〇八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』

特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄（駒ヶ根・安楽寺）
巖谷勝正（目黒・祐天寺）
魚尾孝久（三島・願成寺）
大江田博導（仙台・西方寺）
北山大超（焼津・光心寺）
加藤亮哉（五反田・専修寺）
熊谷靖彦（佐賀・本應寺）
桑原恒久（川越・蓮馨寺）
佐藤孝雄（鎌倉・高德院）
佐藤成順（品川・願行寺）
佐藤良純（小石川・光圓寺）
東海林良雲（塩釜・雲上寺）
須藤隆仙（函館・称名寺）
高口恭行（大阪・一心寺）
田中光成（町田・養運寺）
中島真成（青山・梅窓院）
中村康雅（清水・実相寺）
中村瑞貴（仙台・愚鈍院）
野上智徳（静岡・宝台院）
藤田得三（鴻巣・勝願寺）
堀田卓文（静岡・華陽院）
本多義敬（両国・回向院）
真野龍海（芝・天光院）
肱 博之（網代・教安寺）
水科善隆（長野・寛慶寺）
宮林昭彦（大本山・光明寺）
山田和雄（諏訪・貞松院）
（敬称略・五十音順）

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

第一番

二十五霊場を歩く

美作の国

誕生寺縁起

法然上人降誕の聖地、美作国久米南条郡稲岡北庄（岡山県久米郡久米南町北庄）に建立された浄土宗の特別寺院。

法然上人（円光大師）二十五霊場の第一番。

建久4年（1193）、熊谷直実が法然上人誕生の奇瑞にあやかり、この地に残されていた父公の館

の西方の椋の木の傍らに一字を建てて誕生寺と名づけたと伝えられる。

御影堂の法然像は法然上人43歳の自作の像で、それをがこの地に持参して安置したとされる。御影堂須弥壇の位置は上人誕生の室のあった所。

境内には、前庭に上人お手植えの公孫樹と旅立ちの勢至丸像があり、威風ある山門の正面に壮大な御影堂を構える。現在の建築は元禄8年（1695）に廻誉上人が再建した。国指定重要文化財である。



法然上人鑽仰会の

本

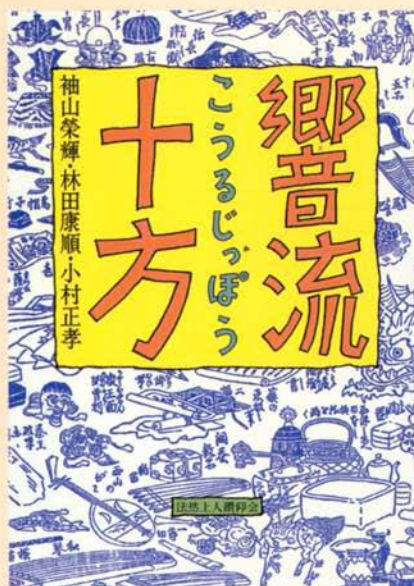
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう
600円(税別)

『差出人は法然さん』
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円



※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円(別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より